

《第7回国際シンポジウム報告7》

# タカラヅカの文化誌

— メディア・イベントとタカラヅカ —

津金澤 聰 廣\*

〔報告者の津金澤先生は、報告書用の原稿執筆時に体調を崩され、入稿が間に合いませんでした。ここでは、本セッションの企画者、内田が当日のご報告内容を、私なりに、ごく短く要約します。文責は内田にあります。また、当日、津金澤先生は、非常に詳細なレジュメ（資料集）をご準備されましたので、当日配布のレジュメ（資料集）を掲載いたします。このような原稿は異例ではありますが、当日の雰囲気や趣意を良く伝える点では、資料的価値があるかとも考えます。なお、レジュメ（資料集）を掲載するスタイルは、津金澤先生ご自身が提案されました。（内田忠賢）

### 【要 約】

阪急電鉄の創始者、小林一三は自らの経営戦略としてだけでなく、社会的使命・理想のもと、宝塚歌劇を創出した。それは、日本におけるメディア・イベント活用の先駆けであり、新しい社会事業の創造プロセスであった。特に、近代日本における、大衆娯楽の展開、女性の社会進出、モダニズムと風俗、生活文化の創造という広範なテーマに連続する。キッシュ／キラキラな大衆文化が、賛否両論の時流の中で、日本社会に確固たる地位を獲得したプロセスである。（内田忠賢）

## I 小林一三によるタカラヅカ戦略

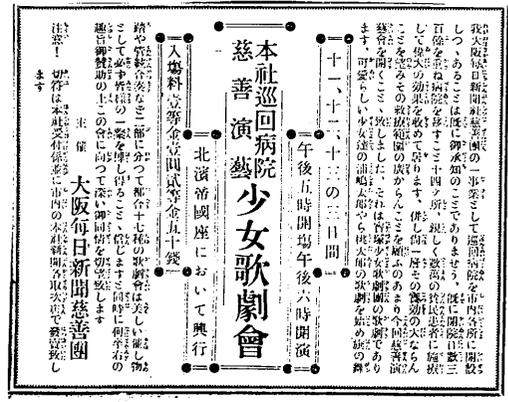
### (1) メディア・イベントとして出発した宝塚

#### 少女歌劇

- 新聞社の販売戦
- 社会福祉事業
- 宝塚少女歌劇

小林一三『逸翁自叙伝』（昭28）

「宝塚少女歌劇が時代の新興芸術として目ざましく浮彫されてくると、その年の12月、大阪毎日新聞は、大毎慈善団基金募集のために、



『大阪毎日』社告（大3・12・4）



お伽歌劇「ひな祭り」(大4)



初公演のダンス胡蝶 (大3、4月)



初公演の管絃合奏 (大3、4月)

大阪北浜帝国座において、三日間（そののち一週間）興行を連続して成功し、爾来、毎年年末行事として、〈中略〉観客の増加するに従って、収容数を増加し得る積極的効果を挙げ得たことは、大毎の支援と同情によると共に、宝塚の真価が広く世間に認められたものと感謝しているのである。】

小林一三の「女性の時代」胎動への着目→女性・子ども・家庭関連の集客戦略

1911 (明44)「山林子供博覧会」於 箕面動物園

《以下いずれも『大毎』との協賛・後援》

1913 (大2)「婦人博覧会」於 宝塚新温泉

1914 (大3)「婚礼博覧会」於 同上

→その余興として「宝塚少女歌劇」初公演

1915 (大4)「家庭博覧会」於 同上

1932 (昭7)「婦人子供博覧会」於 同上

「宝塚少女歌劇」—事業としての演劇

西洋音楽を中心とした新しい歌・舞・伎  
歌劇の日本化と和洋折衷  
大衆本位・家庭本位・娯楽本位の理念



大劇場による新しい国民劇創成への夢  
東京宝塚劇場開設とレビュー時代へ

(2) 阪急沿線における郊外ユートピアの理想 (ローン方式の推進)

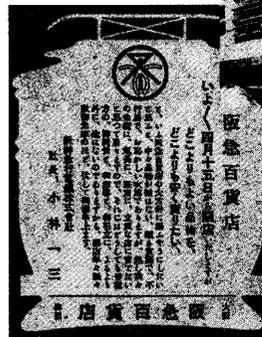
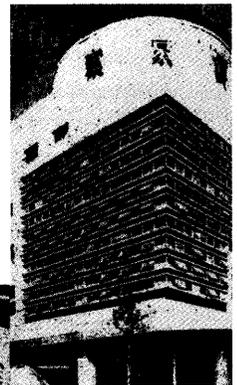
「郊外の気分に漂ふ」「愉快なる生活の出来る中産階級の楽園」

(『阪神毎朝新聞』大15-1・3 小林一三「阪急だより」参照)

(3) 明朗なる「自然主義都会」と「明朗なる歓楽境」としての都市設計

池田室町、田園調布、甲東園学者村構想  
梅田ターミナル (デパート)、有楽町娯楽

沿線の行事イラスト  
(『山容水態』大3)



阪急百貨店開店の新聞広告 (昭和4年)

東京宝塚歌劇 (昭9年)

街、江東楽天地、など

「みみず電車」として皮肉られつつ発車した沿線開発

小林一三の述懐

「宝塚新温泉という人工的遊楽空間も、まさに窮余の策だった」

「この馬鹿げた客引き」とみつつ、一方では「宝塚新温泉での博覧会や少女歌劇が、女性や子どものための〈家庭本位〉の新しい娯楽として迎えられたことや、郊外住宅地経営が予定以上にうまく進展した見通しについては、何人にも誇ることができる」と信じている」

## II 小林一三の歌劇文化論

——「大衆本位」「家庭本位」「娯楽本位」

タカラヅカ90年の成功要因

- (イ) 宝塚音楽歌劇学校設立による人材戦略
- (ロ) 劇場経営の合理化→事業としての演劇戦略
- (ハ) 雑誌『歌劇』の創刊等によるメディア戦略

### (1) これらの底流にある一三の「家庭本位」の強調の意味するもの

「家庭の男女老幼膝を交へて観覧しても、毫も他の演芸の如く顔を赫らむるが如き場合なきを信じたるがために他ならず」

一三の俳優観

「在来の演劇界乃至俳優社会と言ふものは、汚濁を極める沼であり、魔の森であり、深淵である」「俳優を志すほどの者は、いずれも一種の露出症とも言ふべき変態心理の持主で舞台に立って大勢に自分を見せたい、見て貰ひたいと思ふ下心があればこそ俳優にならうとするのである」(『日本歌劇概論』)

一三自身は「芸界の改革者」たらんとする「花柳芸術の謀反人」と自称

「花柳芸術の淫蕩的気分、不潔さ、消極的でメランコリックな受け身の思想」を否定  
「旧来の道德観念」「花柳芸術的気分」を離脱→「大衆本位」「家庭本位」  
「家族そろって楽しむ」家庭中心主義、「娯楽本位」⇔直輸入式「帝劇オペラ」の高級性

キッチンとしての宝塚少女歌劇に対しては→当初から批判が渦巻いていた→それらを雑誌『歌



第14号  
(大正10年)



第18号 (大正10年)  
森田ひさし画



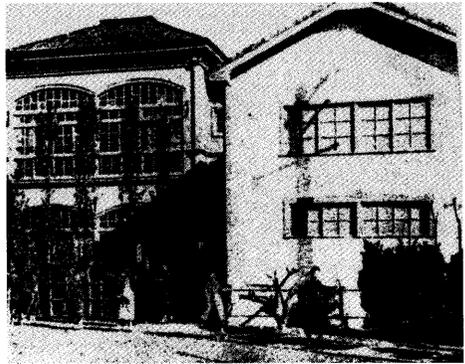
第19号 (大正10年)  
森田ひさし画

劇』でとりあげ反論を展開

少女歌劇への非難の例

「遊戯的気分で物足りない」「未成熟」「幼稚」  
 「不自然」「変態」「非芸術」「アマチュア  
 的」「味噌とバタの不調和」

〈参考〉鶴見俊輔：「純粹芸術 (Pure Art) に比べると、俗悪なもの、非芸術的なもの、ニセモノ芸術と考えられている作品を「大衆芸術」(Popular Art) と呼ぶ」(『芸術の発展』(1960) 『限界芸術論』勁草書房、1967年、に所収)



宝塚音楽歌劇学校 (大8年頃)

(この背景には、一三が幼少時代から「孤児同然」の生育経験や、経営者としての雇用対策も)

(2) 一三の「時代錯誤歌劇論」(『歌劇』第10号、大9-8)

「少女歌劇は時代錯誤その物が値打ち」「日本のあらゆる面での不調和の現状」  
 「不調和の調和」「未成品の妙味」「不休の変化に対応する矛盾の快感」を提供

少女歌劇：「不調和の非芸術」と「社会調和的な家庭本位」思想とが「矛盾的に混在する」大衆芸術としての位置づけ →つまり、少女歌劇での「不調和の非芸術」という先端的風俗と、実生活での保守的な「家庭本位」主義との野合  
 →非難を一方でかわし、その風俗の先端性を社会的に容認させるひとつの窓口、方便か。

音楽歌劇学校の教育方針

「意外な花嫁学校」(一三『宝塚漫筆』1955年)



現在は「芸能タレント養成学校」化?

→「上手な女優を作るより、先ず一人前の女性を作ること」

「普通一般の女生徒を標準として、女としての幸福を守り通すやうに」

「六百人の女生徒の中の幾十人かの優秀な芸術家を生み出すより、残りの五百数十人が、家庭の奥様になるにふさわしい芸術的な教養を受け、新しい女性として『朗らかな、明るい家庭』を作ることが大切」

「健康美こそ美人の第一要件」⇔(竹久夢二的女性イメージと対比)

「芸術的教養があり、音楽もでき、踊りもできる善良で『上品なマダム』が理想」

(3) 一三の女性観

宝塚音楽歌劇学校における全人教育の理想としての家庭本位主義(阪急デパートでの女子店員教育と共通)

≡「結婚第一主義」

宝塚出身者に対し、「永久に家族的愛と温情と、いつ会ってもうるわしい笑顔で話し合う美風」を守ることを期待、一方「恋愛による結婚の甘さ」を嫌い

→自由恋愛を家庭道德の破壊者とする当

時の一方の思想風土とも連動  
坪内逍遙の「家庭文化」論に近く、大正モ  
ダニズムの風潮とは逆流する

### 宝塚音楽歌劇学校の目的

(文部省私立学校令により設立認可、大7年12月)

(東京音楽学校、フランス歌劇学校を範)

「生徒の技芸の向上、その品性の陶冶」を特色  
現在の学則第一章「本校は音楽・舞踊・演劇  
等の芸能を練磨し、清純高雅な人格と広  
く豊かな教養を養い、社会文化の向上に  
寄与させることを目的としている」(15  
歳以上18歳まで)

1930(S5)年の学校側の説明(この年、入学試験の募集人員50名、応募者400名)

「一流女学校に比しても少しも遜色のない率を示していますのも、実に本校生徒の品行方正、學術技芸の優秀であって、なんら普通の女学校教育に劣ることなく、而も近代人の要求である情操教育、芸能教育に多大の貢献をなしつつあることが一般に了解され、最愛の子女を託しても充分安心していただけるという信用を得た結果に外ならないと信ずるのであります。」

### Ⅲ レビューの時代へ

東京宝塚劇場の開場(昭9、月組「花詩集」公演)

(株)東京宝塚劇場設立(昭7-8月、後の東宝へ)

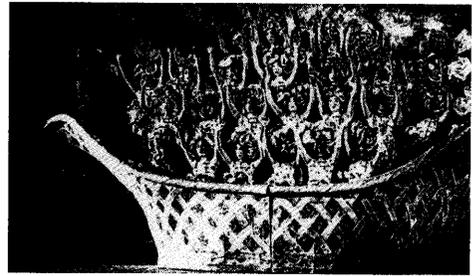
#### (1) 小林一三、有楽町「アミューズメント・センター」創成

池田室町の沿線開発→「田園調布の大恩人」

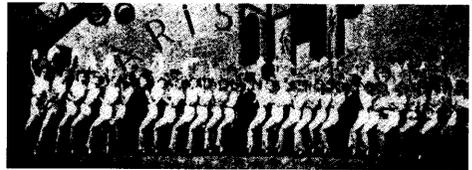
→東京電燈(現東京電力)「再興の祖」→有

楽町の土地取得→東京宝塚劇場設立

大正7年5月帝国劇場で初公演、この年8月雑



レビュー「パリゼット」(昭和5年)



レビュー「セニヨリータ」(昭和6年)

### 誌『歌劇』創刊

東京宝塚劇場設立にちなむ標語づくり

→「初夢有楽町」の第三節

「そのプロローグとして 我等の舞台 朗らかに清く正しく美しく 我等の宝塚こそ 大衆芸術の陣営 家庭共楽の殿堂 お、我東京宝塚劇場！」(傍点は津金澤)

一三「東京へ！東京へ！」(『歌劇』148号、昭7年7月)

「東京へ！東京へ！今や進軍ラッパは我一党の若い人達の血を躍らすであろう。東京のエライ人達が、自己陶醉に威張っている間にそれは恰かも江戸の八百八町が、いつの間にか薩長の足軽達に蹂躪せられし如くに無言にして只だ黙々と実行するのみである。宝塚一党の青年達が勇氣と情熱とそして頼母しい微笑の間に、劇界革命の旗印を日比谷公園の一角に樹るべき其音頭取として私は若返へることを喜ぶものである。」

「有楽町アミューズメント・センター」の成功→江東楽天地(省線錦糸町駅中心の工場地帯の楽天地-パラダイス)建設→「浅草宝塚劇場」

「浅草地下劇場」設立(撤退)→「新宿コマス



江東楽天地全図 (池田文庫蔵)

タジアム」(株)「後楽園スタジアム」設立へ

(2) 「朗らかに、清く正しく美しく」のモットー (昭9年前後から)

- (イ) かつての独身男性本位の「暗い娯楽」から脱出
- (ロ) 若い女性や子ども本位の「朗らかなもの」の安価な提供が夢
- (ハ) 当局の取り締まりに対する防波堤→内に対しては、生徒の守るべき規範として、つまり、内外に純潔イメージをアピールする経営上の必要があったのでは。

〈例〉昭10、兵庫県当局が生徒に対し「遊芸稼ぎ人」として課税事件発生→税金対策上も「生徒」を強調

- (ニ) 一三の「はだか亡国論」の主張、「エロ本位」の演劇を排撃  
「自分が一番苦心したのは宝塚精神とでも言うことである」  
(『逸翁らくがき』)

(3) 新しい宝塚モダニズムとは？ (明治の文明開化と戦後の占領期アメリカン・モダニズムの谷間)

「日本モダニズム」とは1920年代後半から、

1930年代なかば頃までの期間にみられる欧米文化の影響を強く受けて流行した独特の思想と風俗

南博：「西洋の生活合理主義」の思想と「モガと彼女らをシンボルとした風俗の解放」

風俗的モダニズムの現出

- (イ) 地域モダニズムとしての郊外ユートピアへの風土的イメージ
- (ロ) 宝塚少女歌劇の大劇場による一大スペクタクル・レビューの成功

スピーディーな場面転換や電飾装置  
群舞の集団美、ラインダンスの「エロ味」、躍動感  
舞台セットや電飾など照明技術による幻想美 (ファンタジー) 効果  
華麗な大階段のフィナーレ演出  
淡い異国調の新時代の色彩の服飾ファッションや化粧法

- (ハ) 主題歌として歌われたシャンソンやジャズ音楽の輸入

宝塚シンフォニー・オーケストラ (大12年) → 「宝塚交響楽協会」を翌年結成

Ⅳ タカラヅカの風俗的モダニズムへの「非難」

- (1) 大15年『音楽評論』「宝塚少女歌劇のバリ出演を阻止せよ」(「宝塚少女歌劇の外遊問題」『歌劇』大15-10月に再録)について

「あのような低俗なものをバリまで持ち出すのは国辱もの」という非難

「この中には宝塚の隆盛は関西人の趣味が東京人より著しく劣っていることのあらわれだとか、大阪人は宝塚以外のものを聞かなくなってしまっているのです、これは音楽



大劇場における宝塚シンフォニーの演奏会  
(大13)

を普及させるところか音楽文化を妨害するものだとかいったくだりがある。まるで言いたい放題の悪口三昧なのであるが、宝塚を批判する東京人の本心は案外こんなものであったのかもしれない(渡辺裕『宝塚歌劇の変容と日本近代』新書館、1999、117ページ)

東京人の大阪人に対する視線の問題も「このようなものが受ける大阪の観客自体が俗悪で低級という批判」同上(111ページ)

有力な音楽評論家・野村光一

「レヴュウの本義はエロ趣味」という非難(『東京日日』昭9)

宝塚のレビューもエロ趣味で「裸のみの肉体美」本位であり、それが「反道徳的」で「非国民的」だとする攻撃

一三の持論(反論)(「明日の娯楽と興行界」『歌劇』142号)

「大阪が新時代の国民的芸術を生育し得る不思議な力を持つ其唯一の理由は、其バックに国民大衆の支持を得るからである。新興芸術としての宝塚少女歌劇は言ふ迄もなく壮士芝居の昔から、引つづいて雲右衛門、曾我廼家一座、新国劇、萬歳、河合ダンス等、国民大衆の支持によって生育し、存在し得る迄に発達し得るからであって、特権階級の力の強い東京は新時代の粗製品を受け入れて、これを精巧品に仕上げるだけの



渡米記念(昭14-4月)

寛容を許さないから出来ないのである。」

## (2) 日中戦争(昭12)後、観客動員数は激減 一三「新春を迎えて」『歌劇』(昭13. 1)

「国家非常時に於て、家庭本位の娯楽機関が影響を受けることは当時の義務」「私の心配していることは戦後における此種の高尚なる娯楽芸術—清く正しく美しい宝塚の少女歌劇が、今迄通り悠長に、保存出来るだらうか、といふ問題は、演劇の革新機運と共に、その荒波に捲込まれるのではあるまいかといふ懸念があるのである。」

『東京朝日』(昭13. 4. 6)による「国辱歌劇」批判掲載(オペラ「蝶々夫人」批判)



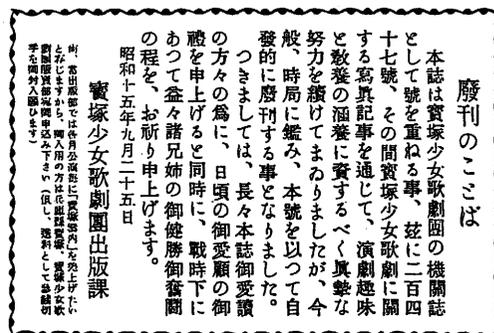
小林一三の対応

一三「私達は、我国運の開展に伴ひ、世界における日本の立場と、その進むべき国家の大方針に遵って、音楽奉公、歌劇奉公の美果を国民大衆に捧げることが心げなくては駄目だと信じている。」(『歌劇』昭13. 5「国辱歌劇」)その他、「善良な風俗とはいへ、難い」断髪批判や「裸体的ダンス」批判も  
一三「そういふ馬鹿々々しい批評を受けないやうに、自ら顧みて、議論の余地のないやうに注意しなければイケナイと思ふ。」(「暑中苦言」昭13. 8)

宝塚少女歌劇 1937年下半期の入場者数

	昭和11年度	昭和12年度	増減数
7月	66,842人	85,409人	18,567人増
8月	159,098	111,672	47,426減
9月	80,449	63,323	17,126減
10月	138,621	74,998	63,623減
11月	140,066	97,224	42,842減
12月(20日迄)	32,792	22,926	9,866減

資料：『歌劇』第214号より



第247号 (昭15年10月号)

公演演目にも戦時色、軍国色らしい演出も盛り込まれた。〈タテマエ〉文化統制の波

〈例〉「海軍省軍事普及部提供・時局レビュー『南京爆撃隊』

「軍歌レビュー『皇国のために』」など。

一三「女子友の会から御注意を受けて」(昭13. 12)では、「恋愛を主題とするもの計りでは感心せず」とか「国民精神総動員の時節として、日本精神発揮のものを取り入れた歌劇を」と注文されたと述べている。  
→タテマエはともかく、実態は大衆娯楽を貫いている。

1940 (昭15) 新聞・雑誌の用紙統制強化、『歌



宝塚唱舞奉仕隊 (昭15-9月)



移動隊、トラックにて農村慰問に出動す。

劇』も不要不急雑誌として廃刊 (昭15. 10)

↓

宝塚唱舞奉仕隊

宝塚移動音楽慰問隊に動員

昭19. 3 大劇場と東京宝塚劇場閉鎖命令

「宝塚音楽舞踊学校女子挺身隊」(昭19. 3)

「宝塚歌劇団勤労報国隊」結成 (昭19. 4)

〈付〉鶴見俊輔「宝塚歌劇五十年の秘密」(鶴見・星野『日本人の生き方』講談社現代新書、1966、所収)

〈私のタカラヅカ研究の出発点〉

小林一三を大正期ユートピア思想のひとつとして捉える観点

「小林一三の雄大なユートピア構想の小さな原点として、宝塚少女歌劇だけが今日まで生き残った」

「男装の麗人」とは、「大正時代にはまだ男女交際の自由がなかったもので、日本の少女は、自分たちにゆるさされる少女同士の交際の中に、男性へのあこがれを託さざるをえなかった。だがそれだけではない。大正時代の少女たちは、明治までの女性のように男性に服従する暮らしにあきたらず、みずからの手で、よりよき男性の姿をかたどろうとしたのだ。」「よりよき男性の肖像では

なかったか」

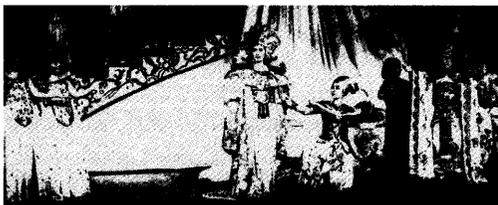
現代の日本の少女たち「少女たち自身によって演じられる、よりよき男性の肖像が、現実の男性以上に彼女らに好ましいからではないか」

欧米人のタカラヅカ批評→「女だけでは不自然」「両性具有の変態性」観

今泉文子「池田理代子・白雪姫はどこに目覚めるか」(『ユリイカ』1981、臨時増刊号)では「男でもなく女でもない無性性への激しい願望」と指摘

小林一三「女からみた男役というものは、男以上のものである。いわゆる男性美を一番よく知っている者は女である。その女が工夫して演ずる男役は、女からみたら実物以上の惚れ惚れする男性が演じられているわけだ。そこが、宝塚の男役の非常に輝くところである。」(『宝塚漫筆』)

鶴見「宝塚歌劇は、少女趣味の夢物語にすぎない面をもっているが、同時に、近代日本にはまれな、女性による自治の場でもあった。3-4百人の少女が幾組かに分かれ、少女の組長・副組長の下に団体生活を続けるという環境は、男女共同の職場にまして、しんの強い女性性を生み出した。」



『トウランドット姫』白井作。(中央)草笛美子、(右へ)小夜福子、天津乙女。(昭和9年3月)

〈例〉天津乙女、三益愛子、轟夕起子、葦原邦子、小夜福子、大江美智子、春日野八千代、越路吹雪、淡島千景、乙羽信子、新珠三千代、有馬稲子、扇千景、八千草薫、浜木綿子、剣幸、真帆志ぶき、鳳蘭、寿美花代、紫苑ゆう、榛名由梨、安奈淳、大浦みずき、麻美れい、順みつき、平みち、汀夏子、真矢みき、黒木瞳、涼風真世、以上《順不同》など。

〈参考〉ジェンダーの視点からみた公演作品の分析についての最近の文献例

- 1) Jennifer Robertson "TAKARAZUKA" Univ. of California Press, 1998  
(堀千恵子訳『踊る帝国主義』現代書館、2000)
- 2) 徳富奈津子「レビューにみるオリエンタリズム」津金澤・名取編『タカラヅカ・ベルエポックII』神戸新聞総合出版センター、2001
- 3) 小谷真理「すみれのセクシュアリティ」(『ユリイカ』特集 宝塚 青土社、2001、5月号)
- 4) 袴田麻祐子「『レビュー』の変遷」(『ユリイカ』特集 宝塚 青土社、2001、5月号)
- 5) 川崎賢子『宝塚というユートピア』岩波新書、2005年

〈主な引用・参考文献〉

- 1) 『小林一三全集』全7巻、ダイヤモンド社、1961~62、全集のほか雑誌『歌劇』より引用。
- 2) 『宝塚少女歌劇二十年史』宝塚少女歌劇団、1933
- 3) 『宝塚少女歌劇四十年史』宝塚歌劇団出版部、1954
- 4) 橋本雅夫『夢を描いて華やかに—宝塚歌劇80年史』宝塚歌劇団、1994
- 5) 『すみれ花歳月を重ねて—宝塚歌劇90年史』宝塚歌劇団、2004
- 6) 上田善次『宝塚音楽学校(改訂版)』読売ライフ、1986
- 7) 『東宝三十年史』東宝、1963
- 8) 『レビューと共に半世紀—松竹歌劇団50年のあゆみ』松竹歌劇団、1978
- 9) 村島歸之『小林一三』国民社、1937
- 10) 那波光正『小林一三翁が遺されたもの』文芸春秋、1969

- 11) 阪田寛夫『わが小林一三―清く正しく美しく』河出書房新社、1983
- 12) 矢野一郎『田園調布の大恩人・小林一三翁のこと』矢野恒太記念会、1986
- 13) 南博編『大正文化』勁草書房、1965
- 14) 鶴見俊輔・星野芳郎『日本人の生き方』講談社、1966
- 15) 津金澤聰廣「小林一三の余暇思想」『現代風俗83』（第7号）現代風俗研究会、1983
- 16) 同上『宝塚戦略―小林一三の生活文化論』講談社、1991
- 17) 同上「小林一三・東京に残した足跡」『東京人』1998、5月号
- 18) 同上「大正・昭和戦前期の総合芸術雑誌」『歌劇』（1918～1940年）の執筆者群と読者層（復刻版『歌劇』執筆者索引・解説篇所収）雄松堂出版、1999
- 19) 石子順造、上杉義隆、松岡正剛編『キッチン

- ―まがいものの時代』ダイヤモンド社、1971
  - 20) 石子順造『キッチュの聖と俗―続・日本庶民の美意識』太平出版社、1974
  - 21) イアン・ビュルマ（山本喜久男訳）『日本のサブカルチャー・大衆文化のヒーロー像』TBSブリタニカ、1986
  - 22) 渡辺裕『宝塚歌劇の変容と日本近代』新書館、1999
  - 23) 同上『日本文化モダン・ラブソディ』春秋社、2002
  - 24) 『ユリイカ・特集 宝塚』青士社、2001、5月号
  - 25) 津金澤「大阪毎日新聞社の事業活動と地域生活・文化―本山彦一の時代を中心に」（津金澤編『近代日本のメディア・イベント』同文館、1996）
- その他。



(昭6年)



(昭8年)



(昭23年)

〈資料1〉

表1 『歌劇』〈女学校宝塚通信〉高女別投稿掲載数  
一覧 ——124(昭和5・7)~143号(昭7・  
2)の19カ月間の数字——

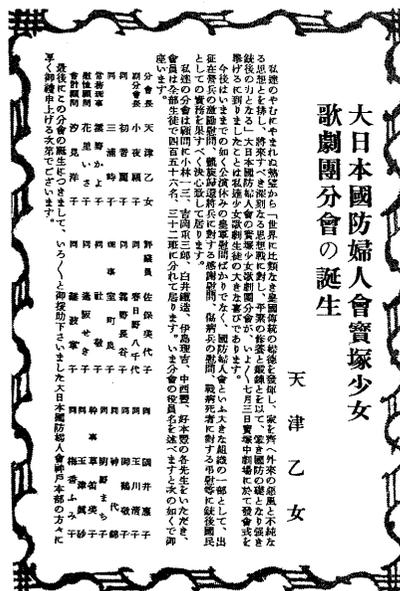
(順位)	高女名	掲載数	(順位)	高女名	掲載数
(1)	東京三輪田高女	16	(2)	大阪府立夕陽ヶ丘、 県立福岡高女、お 茶の水高女、大妻 高女(東京)、東 京市立高女、県立 松江高女、大阪市 立高女、県立高岡 高女、森高女、宣 真高女(大阪)	2
(2)	女子学習院	15	(3)	明浄高女、東洋高 女(東京)、文化 学院(東京)、大 阪府立茨木高女、 若松高女(福島)、 東京高女、増谷高 女、岐阜県立中津 高女、東京双葉高 女、順応高女、長 崎市立高女、大阪 府立富田林高女、 桜蔭高女、東京家 政高女、実践聖心 高女(東京)、武蔵野学院 高女(大阪)、樟 陰高女(大阪)、 東京千代田高女、 山手高女(神戸) 以上50校	1
(3)	親和高女(神戸)	9			
(4)	神戸市立第一高女 梅花高女(大阪)	8			
(6)	東京山脇高女 東京跡見高女	7			
(8)	東京府立第一高女	6			
(9)	相愛高女(大阪)	5			
(10)	東京女学館 神戸家政高女 青山女学院(東京) 松蔭高女(神戸)	4			
(14)	府立大手前高女(大阪) 九段精華高女 女子学院(東京) 神戸市立第二高女 帝塚山高女(大阪) 京都堀川高女 金蘭高女(大阪)	3			

〈津金澤聰廣調べ〉

ほの席の研究(1930年8月調査)

若い男(30歳前後まで)	72名	少女 (推定15、6歳までを指す)	5	
若い女(20歳代の人を指す)	52	女の子	13	
女(中年の)	27	男の子	7	
男(同上)	16	老婆	2	
			計	194名

資料：『歌劇』第126号



「歌劇」1940(昭和15)年7月号

表2 『歌劇』「高聲低聲」欄・性別投稿〔掲載〕者数および百分率  
(1921年~1940年の20年間)

号	発行年月	男	女	不明	男女計	(平均頁数)備考
第12号 21号	1921(大10)年 1月および 3~11月 〈小計10カ月〉	以下1号 当り平均 32.8人 (59.4%)	以下1号 当り平均 20.9人 (37.9%)	同左 1.5 (2.7)	以下1号 当り平均 55.2人 (100.0%)	3月号から月刊 (30.7) *〈31.3%〉 平均98頁 〈総頁数
第48号 57号	1924(大13) 年3~12月 〈小計10カ月〉	29.1人 (78.9%)	7.2人 (19.5%)	0.6人 (1.6)	36.9人 (100.0%)	(19.7) *〈17.7%〉 〈111頁〉
第76号 81号	1926(大15・昭 元)年7~12月 〈小計6カ月〉	28人 (79.6%)	6.8人 (19.4%)	0.3人 (0.9)	35.2人 (100.0%)	(18.5) *〈16.2%〉 〈114頁〉
第124号 129号	1930(昭5)年 7~12月 〈小計6カ月〉	32人 (52.9%)	27.2人 (44.9%)	1.3人 (2.2)	60.5人 (100.0%)	(23.2) *〈19.5%〉 〈119頁〉
第142号 153号	1932(昭7)年 1、2、6、7、11、12月 〈小計6カ月〉	47人 (54.8%)	36.3人 (42.3%)	2.5人 (2.9)	85.8人 (100.0%)	(29.3) *〈23.4%〉 〈125頁〉
第172号 177号	1934(昭9)年 7~12月 〈小計6カ月〉	30.8人 (42.9%)	39.3人 (54.8%)	0.17人 (2.3)	71.8人 (100.0%)	(25.8) *〈18.8%〉 〈137頁〉
第216号 225号	1938(昭13)年 4、5、10、11、12月 〈小計6カ月〉	10.5人 (20.7%)	40人 (78.9%)	0.17人 (0.3)	50.7人 (100.0%)	(20.5) *〈9.5%〉 〈216頁〉
第242号 247号	1940(昭15)年 5~10月 〈小計6カ月〉	6.3人 (24.8%)	19人 (74.5%)	0.17人 (0.6)	25.5人 (100.0%)	(14.3) 最頻値(17)** *〈6.7%〉 〈215頁〉

(注)創刊号〈1918年8月〉は2頁から出  
発。

\* 平均総頁数に占める「高聲低聲」欄  
平均頁数の割合(%)

\*\* 第247号(1940年10月)は強制廃刊  
号で、「高聲低聲」欄は廃止となり、  
それに代って「歌劇論壇・読者の隣  
り組」と名称変更となった。総頁数  
も6頁と大幅縮小、掲載者は男性名  
4名、女性名2名計6名。

男性名：「高三  
生」「AT」「江  
戸っ子」「小林一  
三」

第247号の掲載

女性名：「船場の  
娘」「辻村雪子」  
の計6名。

〈津金澤聰廣調べ〉

## 〈資料2〉 小林一三・略年譜

1873(明治6)年		1月3日、山梨県北巨摩郡韮崎町に生る。
1892( 〳 25)年	19歳	慶応義塾を卒業。
1893( 〳 26)年	20歳	三井銀行入社、9月大阪支店詰となる。
1900( 〳 33)年	27歳	丹羽コウ女と結婚。
1907( 〳 40)年	34歳	三井銀行を退職。 箕面有馬電気軌道株式会社創立の追加発起人となる。 10月創立総会にて専務取締役に就任。
1903( 〳 41)年	35歳	10月、「最も有望なる電車」という宣伝パンフレット発行。 (日本最初の企業PR冊子であろう。)
1909( 〳 42)年	36歳	開業に先立ち、土地経営の宣伝パンフレット発行(沿線の住宅地開発のはしり)。
1910( 〳 43)年	37歳	3月10日、宝塚線・箕面支線営業開始。
1911( 〳 44)年	38歳	5月宝塚新温泉開業。10月箕面動物園にて、山林子供博覧会を開催 (電車の誘客目的の催しとして日本最初)。
1912( 〳 45)年	39歳	宝塚新温泉内に新館パラダイスを開設。
1913(大正2)年	40歳	豊中運動場完成(大正4~5年、大阪朝日主催第1、2回全国中等学校優勝野球大会を開催)。 7月、宝塚唱歌隊(大正3年に少女歌劇、更に歌劇団と改称)を組織する。
1918( 〳 7)年	45歳	箕面有馬電気軌道株式会社を阪神急行電鉄株式会社と社名変更。 宝塚少女歌劇東京初公演。宝塚音楽歌劇学校創立。校長に就任。
1920( 〳 9)年	47歳	神戸線本線と伊丹支線開通。「きれいで、早うて、ガラアキ」という広告コピーが評判となった。
1924( 〳 13)年	51歳	梅田に阪急ビル竣工、2階に食堂を開設。 大劇場主義を実現する4,000人収容の宝塚大劇場竣工。
1925( 〳 14)年	52歳	KK宝塚ルナパーク開業(動物園)。 阪急ビルの2階と3階に直営マーケット開業。食堂は4、5階で営業(日本最初のターミナルデパート)
1927(昭和2)年	54歳	KK宝塚植物園設立。阪神急行電鉄KK取締役社長に就任。東京電燈KK取締役に就任。 花組公演「モン・パリ」日本最初のレビューとして大評判となる。
1929( 〳 4)年	56歳	阪急百貨店開業。六甲山ホテル開業。阪急自動車KK設立。
1932( 〳 7)年	59歳	KK東京宝塚劇場創立、取締役社長に就任。
1933( 〳 8)年	60歳	東京電燈KK社長に就任。
1934( 〳 9)年	61歳	東京宝塚劇場竣工。阪急電鉄社長を辞任し会長に就任。 日比谷映画劇場開場(入場料50銭均一の洋画上映館として一新紀元を画す)。
1935( 〳 10)年	62歳	日劇を東宝経営とし、有楽座開場(東宝劇団初公演)。 9月欧米視察の途に上る(翌年4月帰朝)。
1936( 〳 11)年	63歳	阪急職業野球団結成。雅俗山荘を作る。 東宝映画配給KKを設立。帝国劇場、東京会館、日本劇場を買収する。
1937( 〳 12)年	64歳	KK梅田映画劇場設立、社長に就任。KK第一ホテル相談役に就任(開業は翌年)。KK江東楽天地設立(開場は翌年)。西宮球場開設。 東宝映画株式会社を創立し、相談役となる。
1938( 〳 13)年	65歳	東宝はKK後楽園スタジアムを経営することとなる。
1940( 〳 15)年	67歳	東京電燈社長を辞し(会長専任)、親善使節としてイタリー訪問。7月、第二次近衛内閣の商工大臣就任。東亜経済使節として蘭印に赴く。
1941( 〳 16)年	68歳	官僚統制派の商工次官岸信介を辞任させたが、軍・官僚の反撃で大臣を追われ、貴族院議員に勅選。
1945( 〳 20)年	72歳	10月幣原内閣の国務大臣兼戦災復興院総裁に任ぜられる。
1946( 〳 21)年	73歳	3月公職追放令により追放さる。(東宝争議始まる。1948年妥結。)
1951( 〳 26)年	78歳	追放解除、宝塚音楽学校校長に就任。KK宝塚映画製作所設立。東宝社長に就任(1955年82歳で辞任)。(新日本放送、阪急ビル西館で開局)
1952( 〳 27)年	79歳	阪急不動産KK設立。欧米映画界視察のため外遊(10月~12月)。

1953(昭和28)年	80歳	浅草宝塚劇場開場。 東宝は有楽座と南街劇場(難波)にてわが国初公開のシネマスコープ『聖夜』を独占上映。
1956( 〳 31)年	83歳	K K 新宿コマ・スタジアム、及びK K 梅田コマ・スタジアム設立、社長に就任。
1957( 〳 32)年	84歳	1月25日、池田市の自邸にて急逝。

(資料) 小林一三翁追想録編纂委員会「小林一三翁の追想」、1961年、より作成。

### 小林一三・著作年表

1890年	小説「練絲痕」山梨日報『公私月報』第47号付録
1915年	小説『曾根崎艶話』初山書店(発禁) →1948年芙蓉書房(再刊)
1917年	『歌劇十曲』宝塚歌劇団
1923年	増補『日本歌劇概論』宝塚歌劇団
1926年	『続・歌劇十曲』宝塚歌劇団
1932~33年	『雅俗山莊漫筆』第一~第四、私家版
1933年	『奈良のはたごや』岡倉書店
1935年	『私の行き方』斗南書院
1936年	『私の見たソビエト・ロシヤ』東宝書房
〳	『産業は国営にすべきか』今日の問題社
〳	『次に来るもの』斗南書院
1937年	『努力すれば偉くなれる』今日の問題社
〳	『映画事業経営の話』東洋経済出版部
〳	『日本はどうなる』ニュー・トビックス社
〳	『戦時国債発行解決策』ダイヤモンド研究所
1938年	『電力問題の背後』東洋経済出版部
〳	『戦後はどうなる』青年書房
1939年	『事変はどう片づくか』実業之日本社
1940年	『蘭印より帰りて』亜細亜情勢研究所
1941年	『蘭印を斯くみたり』斗南書院
1942年	『芝居ざんげ』三田文学出版部
1946年	『復興と次に来るもの』国民公德会
〳	『雅俗三昧』雅俗山莊
1949年	『逸翁らくがき』梅田書房
1951年	『新茶道』文藝春秋新社
〳	『仕事の世界』春秋社
1952年	『私の人生観』要書房
1953年	『逸翁自叙伝』産業経済新聞社
〳	『私の生活信条』実業之日本社
〳	『小林一三対談十二題』実業之日本社
〳	『私の見たアメリカ・ヨーロッパ』要書房
1954年	『私の事業観』要書房
〳	『現代随筆全集・第23巻』創元社
1955年	『宝塚漫筆』実業之日本社

## 〈資料3-1〉

## 宝塚歌劇・年譜(1913~81)\*

宝塚歌劇団編『すみれ花歳月を重ねて—宝塚歌劇90年史』2004年

〈注〉—— 線は津金澤

宝塚歌劇年譜	内外のできごと
■1913年(大正2) 「宝塚唱歌隊」として発足。	■1914年(大正3) 1月17日 東京・有楽座で島村抱月、松井須磨子の芸術座が公演
■1914年(大正3) 4月1日 宝塚少女歌劇第1回公演を開始。 12月11日 大阪市内で初公演(大阪毎日新聞社主催の慈善歌劇会。北浜・帝国座で13日まで)。この後、大正15年までに大阪市内で31公演(通算47日間)	7月28日 オーストリアがセルビアに宣戦。第1次世界大戦始まる 8月15日 パナマ運河が開通 8月23日 日本は連合国側に加わり参戦
■1915年(大正4) 1月1日 正月公演(7日まで)。以後大正9年まで毎年正月・春・夏・秋の年4公演を実施(正月は7~20日間、春、夏、秋は各40~60日間)。ほかに日曜・祝日などに臨時公演	■1915年(大正4) 11月10日 大正天皇ご即位の大礼
■1918年(大正7) 1月11日 大正2年7月に発足した「宝塚唱歌隊」を同年12月に改称した「宝塚少女歌劇養成会」で声楽、器楽、舞踊の3部授業を開始 5月23日 東京で初めて公演(帝国劇場で。23日は試演会、公開は26日から30日まで)。以後大正12年まで帝国劇場で毎年1公演(5~6日間) 8月11日 雑誌「歌劇」創刊(歌劇団の機関誌。最初は年4回の季刊、定価20銭) 12月28日 「宝塚音楽歌劇学校」が設立認可を受ける	■1917年(大正6) 4月18日 沢田正二郎が“新国劇”を設立 11月8日 ロシア革命でソビエト政権が樹立
■1919年(大正8) 1月6日 「宝塚音楽歌劇学校」を設立(校長に小林一三が就任) 「宝塚少女歌劇養成会」を解散し、宝塚音楽歌劇学校生徒と卒業生で「宝塚少女歌劇団」を組織 3月17日 箕面公会堂を移築し、新歌劇場(通称・公会堂劇場)とする。 3月20日から公演開始	■1918年(大正7) 2月4日 箕面有馬電気軌道株式会社は阪神急行電鉄株式会社と改称 11月11日 第1次世界大戦の休戦条約が成立
■1921年(大正10) 3月20日 2部制公演実施。観客増加に対応して生徒を2部に分け、第1部は新歌劇場(公会堂劇場)で、第2部はパラダイス劇場で公演 7月10日 「歌劇」誌友大会を開催(パラダイス劇場)。「愛読者大会」のはじまり 10月15日 花組と月組が誕生(第1部を花組、第2部を月組と改称)	■1919年(大正8) 6月28日 ベルサイユ講和条約に調印 9月1日 帝国劇場でロシア歌劇団が「椿姫」などを上演。本格的な歌劇としては日本初
■1922年(大正11) 1月1日 年8公演を開始(花組と月組が交代で公演) 4月5日 宝塚音楽歌劇学校の新校舎が落成(現在の大劇場客席の位置) 6月5日 宝塚音楽歌劇学校の運動会を初めて開催	■1921年(大正10) 9月2日 阪神急行電鉄(阪急)宝塚—西宮北口間が開通
■1923年(大正12) 1月22日 宝塚新温泉の諸施設が焼失(公会堂劇場、パラダイス劇場、大食堂、図書館、学校新校舎などが焼失、浴場だけが残る) 3月20日 新歌劇場が完成し公演開始(大正13年に「宝塚中劇場」と改称) 8月15日 宝塚新温泉の食堂その他の諸施設が完成(新装のパラダイスが開館して、その3階に宝塚小劇場が開場) 9月 宝塚音楽学校の新校舎が落成	■1922年(大正11) 4月1日 阪神急行電鉄(阪急)宝塚—西宮北口間の複線化工事が完成
	■1923年(大正12) 5月17日 大阪松竹少女歌劇が公演開始 9月1日 関東大地震が起こる 12月15日 東京・歌舞伎座が落成
	■1924年(大正13) 7月25日 株式会社宝塚ルナパークが開業(旧動物園)
	■1925年(大正14) 3月1日 社団法人東京放送局(現・NHK)がラジオ試験放送を開始(7月12日に本放送開始)
	■1926年(大正15) 5月14日 宝塚ホテルが開業 12月18日 阪神急行電鉄(阪急)西宮北口—今津間が開通 12月25日 大正天皇御崩御。昭和と改元
	■1927年(昭和2) 2月1日 株式会社宝塚植物園を設立 12月30日 東京の上野—浅草間に日本最初の地下鉄が開通
	■1928年(昭和3) 10月12日 東京松竹楽劇部(後のSKD)設立 11月1日 新京阪鉄道(後の阪急京都線)大阪天神橋—京都西院間が全通

- 10月 宝塚大劇場の新築工事起工
- 1924年(大正13)
- 1月1日 『宝塚交響楽協会』を結成(はじめは「宝塚シンフォニー演奏会」として活動)
- 7月1日 雪組を新設(宝塚大劇場の開場にそなえて3組交代による公演を開始)
- 7月15日 宝塚大劇場の新築工事が完成
- 7月19日 宝塚大劇場開場。こけら落とし公演を開始(月・花組合同公演「かちかち山」ほか)
- 1925年(大正14)
- 1月1日 大劇場で年12公演開始(花・月・雪組が毎月交代で公演)
- 1926年(大正15)
- 1月7日 岸田辰彌が欧米へ出発(翌昭和2年5月に帰国)
- 1927年(昭和2)
- 9月1日 日本最初のレビュー「モン・パルク吾が巴里よ」初演(岸田辰彌の帰朝第1作)
- 1928年(昭和3)
- 5月1日 宝塚少女歌劇団生徒(研究科生徒)を普通・舞踊・声楽の3科に区分
- 10月10日 白井鐵造、堀正旗が欧米へ
- 1930年(昭和5)
- 8月1日 『パリエット』初演(白井鐵造の帰朝土産レビュー。「モン・パルク」をしのぐ人気で3カ月続演。主題歌「すみれの花咲く頃」がヒット)
- 1931年(昭和6)
- 8月1日 大劇場公演『ローズ・パリ』で初めて銀橋を試用
- 1932年(昭和7)
- 8月12日 株式会社東京宝塚劇場設立(後の東宝株式会社)
- 1933年(昭和8)
- 4月20日 宝塚少女歌劇20周年記念祭(大正2年の宝塚唱歌隊発足から起算)
- 7月1日 新設の星組が初公演。宝塚少女歌劇団の制度改正
- 8月1日 『花詩集』初演(花をテーマにした白井鐵造作の大レビュー)
- 1934年(昭和9)
- 1月1日 東京宝塚劇場が開場(一般公演は2日から。月組公演『花詩集』ほか)
- 1935年(昭和10)
- 1月25日 宝塚大劇場火災、内部全焼(午前7時40分出火、11時鎮火)
- 4月1日 宝塚大劇場の復旧工事完成、星組公演で再開
- 1936年(昭和11)
- 5月15日 雑誌「宝塚グラフ」創刊(月刊。創刊号はB4判の大判で、定価20銭)
- 1938年(昭和13)
- 10月2日 第1回ヨーロッパ公演に出発(天津乙女、奈良美也子以下出演者30人。ドイツ・ポーランド・イタリアの26都市を巡演、14年3月4日帰国)
- 1939年(昭和14)
- 4月6日 アメリカ公演に出発(小夜福子、三浦時子以下出演者40人。ホノルルと米本土9カ所を巡演、7月4日帰国)。
- 12月25日 宝塚音楽歌劇学校を「宝塚音楽舞踊学校」と改称、少女歌
- 11月10日 昭和天皇ご即位の礼(京都で)
- 1929年(昭和4)
- 4月18日 阪急百貨店が営業開始
- 1931年(昭和6)
- 8月1日 松竹が日本最初のトーキー映画「マダムと女房」を封切り
- 9月18日 満州事変起こる
- 1932年(昭和7)
- 1月28日 上海事変起こる
- 1933年(昭和8)
- 1月30日 ヒットラーがドイツ首相に就任
- 1934年(昭和9)
- 2月1日 東京・日比谷映画劇場が開場
- 9月21日 関西地方に大風水害第一次室戸台風
- 1936年(昭和11)
- 1月23日 阪急職業野球団(後の阪急ブレーブス)を結成
- 2月26日 二・二六事件
- 1937年(昭和12)
- 5月1日 阪急西宮球場が開場
- 7月7日 日中戦争起こる(盧溝橋事件)
- 11月6日 日独伊防共協定が成立
- 1938年(昭和13)
- 7月5日 阪神地方に大水害
- 1939年(昭和14)
- 5月11日 ノモンハン事件起こる(満蒙国境で日本軍とソビエト軍が交戦)
- 9月3日 イギリス、フランスがドイツに宣戦(第2次世界大戦始まる)
- 1940年(昭和15)
- 3月1日 帝国劇場は株式会社東京宝塚劇場の直営となる
- 6月17日 フランスはドイツに降伏
- 7月22日 小林一三が第2次近衛内閣の商工大臣に就任
- 9月27日 日独伊軍事同盟を締結
- 1941年(昭和16)
- 6月22日 ドイツがソビエト連邦に宣戦
- 12月8日 日本が米英に宣戦。ハワイを空襲。太平洋戦争が始まる
- 1943年(昭和18)
- 10月1日 阪神急行電鉄は京阪電気鉄道と合併、京阪神急行電鉄株式会社と改称
- 12月10日 東京宝塚劇場と東宝映画との合併が成立、東宝株式会社と改称
- 1944年(昭和19)
- 12月7日 東海地方に大地震
- 1945年(昭和20)
- 3月10日 アメリカのB29爆撃機が東京を夜間大空襲
- 3月13日 B29が大阪を夜間大空襲
- 6月7日 ドイツが無条件降伏
- 8月6日 広島に原子爆弾投下(元・宝塚歌劇団生徒

- 劇団と分離(研究科廃止。本科は1年制を2年制に。学校の生徒は興行団体に加入させない)
- 1940年(昭和15)  
10月1日 「宝塚少女歌劇団」を「宝塚歌劇団」と改称
- 1941年(昭和16)  
8月11日 演劇専科、声楽専科、ダンス専科を設置
- 1944年(昭和19)  
3月1日 宝塚大劇場と東京宝塚劇場に閉鎖命令。東京宝塚劇場は花組公演の舞台稽古を中止  
3月4日 宝塚大劇場公演を打ち切る。観客殺到、大混乱をおこす(雪組公演「翼の決戦」ほか)  
3月21日 「宝塚音楽舞踊学校女子挺身隊」結成式(昭和19年度卒業生と在学生在は川西航空機宝塚製作所へ勤労働員)  
4月1日 宝塚歌劇団創立30周年記念式。同時に「宝塚歌劇団勤労働団隊」結成式  
5月31日 宝塚新温泉の施設を海軍航空隊が接收(宝塚新温泉は営業停止。大劇場と歌劇団事務所などは海軍飛行予科練習生の教室に使用)
- 1945年(昭和20)  
5月5日 「宝塚映画劇場」で公演開始(宝塚ファミリーランド立体動物園の位置にあった旧・宝塚キネマ館)  
8月25日 宝塚音楽舞踊学校生徒の勤労働員解除  
9月1日 宝塚音楽舞踊学校昭和19年度卒業生と在学生在が歌劇団に入団  
9月26日 アメリカ軍が宝塚に進駐、大劇場一帯を接收(宝塚映画劇場9月公演は24日で打ち切り)  
11月1日 宝塚映画劇場を「宝塚小劇場」と改称  
12月7日 「宝塚小劇場」が焼失、公演を中止
- 1946年(昭和21)  
3月18日 宝塚音楽舞踊学校を「宝塚音楽学校」と改称。予科1年制となる  
4月22日 宝塚大劇場の公演再開(雪組公演「カルメン」「春のをどり<愛の夢>」)
- 1947年(昭和22)  
4月1日 東京公演を有楽町・日劇で再開(昭和24年まで年8公演)  
9月2日 「モン・パリ」再演(レビュー20周年記念。白井鐵造演出)
- 1948年(昭和23)  
8月1日 星組が復活(昭和14年に廃止されてから10年目に4組がそろう)
- 1950年(昭和25)  
10月1日 宝塚中劇場を「宝塚映画劇場」と改称  
11月1日 宝塚小劇場を「宝塚第二劇場」と改称
- 1951年(昭和26)  
8月1日 「虞美人」初演(白井鐵造作のグランド・レビュー、初めての1本立て公演。3カ月続演して30万3千人、大劇場入場者数の記録を更新)
- 1954年(昭和29)  
4月1日 歌劇40周年記念式典(大劇場で。小林一三があいさつ)
- 1955年(昭和30)  
4月16日 東京宝塚劇場が再開(1月27日接收解除)。星組公演「虞美人」で開幕  
4月29日 新日本放送ラジオで「宝塚ファンコンテスト」放送開始(阪急園井恵子が被爆して死亡)
- 8月9日 長崎にも原子爆弾  
8月8日 ソビエトが対日宣戦  
8月15日 終戦の詔勅発布。太平洋戦争終わる  
9月2日 日本全権が降伏文書に調印
- 1946年(昭和21)  
2月21日 東京宝塚劇場を連合軍が接收  
9月1日 第1回芸術祭を開催  
11月3日 日本国憲法を公布
- 1947年(昭和22)  
3月31日 株式会社阪急百貨店を設立  
5月3日 日本国憲法を施行
- 1948年(昭和23)  
8月19日 東宝の争議で日映演の組合員が撮影を占拠。武装警官が出動
- 1949年(昭和24)  
11月3日 湯川秀樹博士が日本人で初めてのノーベル賞を受賞
- 1950年(昭和25)  
2月14日 中国とソビエトが友好同盟条約を締結
- 1951年(昭和26)  
8月7日 小林一三は公職追放を解除され、東宝相談役に就任  
9月8日 対日講和条約と日米安全保障条約に調印
- 1952年(昭和27)  
11月16日 アメリカが太平洋エニウェトク環礁で水爆実験
- 1953年(昭和28)  
2月1日 NHKがテレビ放送を開始  
5月5日 阪急西宮球場でナイター開始  
8月28日 初の民間放送テレビ・日本テレビが放送を開始
- 1954年(昭和29)  
3月1日 アメリカがビキニ環礁で原爆実験。第五福竜丸が被災  
4月1日 宝塚市が市制施行  
9月26日 青函連絡船洞爺丸が台風で沈没(元・宝塚歌劇団生徒佐保美代子が遭難)
- 1955年(昭和30)  
1月27日 アーニーパイル劇場(東京宝塚劇場)が連合軍から返還される
- 1956年(昭和31)  
10月19日 日本とソビエトが国交回復  
12月18日 日本が国際連合に加盟
- 1957年(昭和32)  
1月29日 南極観測に昭和基地を建設  
8月27日 茨城県東海村の原子炉に日本最初の「原子の火」を点火  
10月19日 京阪神急行電鉄(阪急)創立50周年記念式典(梅田で)宝塚大劇場で祝賀会
- 1958年(昭和33)  
2月1日 東京宝塚劇場で公演中に火災起こる(3月

- 電鉄提供番組。毎日放送にひきつがれ、49年10月6日まで  
に1,007回放送)
- 1957年(昭和32)
- 1月25日 小林一三が逝去、84歳
- 4月1日 宝塚音楽学校が2年制を採用(32年度入学生徒から予科  
1年・本科1年となる)
- 1958年(昭和33)
- 11月28日 関西テレビで宝塚の定期番組(最初は「宝塚テレビ劇場」)  
放送開始
- 1959年(昭和34)
- 7月26日 カナダ・アメリカ公演に出発(天津乙女、打吹美砂以下出演  
者42人。ニューヨークなど31都市を巡演。11月20日帰国)
- 1960年(昭和35)
- 3月1日 宝塚新温泉を「宝塚ファミリーランド」と改称。宝塚ヘルスセ  
ンター開業
- 8月1日 『華麗なる千拍子』初演(高木史朗作のショー。翌年につ  
けて73万人の観客を集めた)
- 12月29日 10月・東京星組公演『華麗なる千拍子』が芸術祭賞を受賞  
と決定
- 1961年(昭和36)
- 12月18日 11月・東京雪組公演『火の鳥』が芸術祭賞を受賞と決定
- 1964年(昭和39)
- 1月1日 新宿コマ劇場で初めて公演『南の哀愁』『これぞタカラヅカ』  
(昭和46年までは年2公演、以後昭和56年までは年1  
公演)
- 1月25日 「宝塚歌劇50周年・物故者慰霊祭」を宝塚大劇場で執行  
(3月31日は東京宝塚劇場)
- 5月9日 宝塚歌劇50周年記念式典(宝塚大劇場)。「宝塚歌劇団  
歌」を発表
- 1965年(昭和40)
- 1月14日 沖縄で初公演(日航祭に参加して復帰前の沖縄へ。那覇  
で星空ひかるら8人が公演)
- 9月12日 パリ公演(第2回ヨーロッパ公演)に出発(美山しづぐ、真帆  
志ぶさら出演者52人。33回公演。10月21日帰国)
- 1967年(昭和42)
- 7月1日 『オクラホマ!』上演(宝塚で初めてのブロードウェイ・ミュージ  
カル)
- 1968年(昭和43)
- 8月1日 『ウエストサイド物語』初演
- 12月25日 11月・東京月・星合同公演『ウエストサイド物語』が芸術祭  
賞(大賞)と決定
- 1969年(昭和44)
- 2月4日 関西テレビのヤング・バラエティ「宝塚シックス・オー・オー」  
第1回公開録画
- 5月31日 『回転木馬』上演
- 1970年(昭和45)
- 3月14日 『タカラヅカEXPO'70』上演(日本万国博協賛の和洋  
ショー)  
日本万国博開会式で内海重典が演出を担当
- 1971年(昭和46)
- 4月11日 NHK総合テレビ「歌のグランド・ステージ」に毎週ゲストと  
ザ・バンビーズが出演(47年4月まで)
- 29日再開)アメリカが人工衛星打ち上げに  
成功
- 11月15日 大阪・関西テレビが開局
- 12月23日 東京タワーが完成
- 1959年(昭和34)
- 1月1日 キューバで革命起り、カストロ政権を樹立
- 9月26日 伊勢湾台風で東海地方に大被害
- 1960年(昭和35)
- 5月15日 ソビエトが人工宇宙船第1号打ち上げ
- 9月10日 NHKなど8局がカラーテレビ本放送を開始
- 1961年(昭和36)
- 4月12日 ソビエトが人工衛星船ボストークを打ち上げ、  
回収に成功
- 5月5日 アメリカは人間が乗りこんだロケットを打ち上  
げ回収に成功
- 1962年(昭和37)
- 8月12日 堀江謙一青年がヨットで太平洋横断に成功
- 1963年(昭和38)
- 11月22日 アメリカのケネディ大統領が暗殺される
- 1964年(昭和39)
- 10月1日 東海道新幹線東京-新大阪間開通
- 10月10日 東京で第18回オリンピック開催
- 10月12日 中国が初めて核爆発実験
- 1965年(昭和40)
- 2月7日 アメリカが北ベトナム爆撃を開始
- 3月18日 ソビエトが2人乗りの人工衛星を打ち上げ、  
宇宙遊泳に成功
- 10月21日 朝永振一郎博士がノーベル物理学賞を受  
賞
- 1967年(昭和42)
- 6月5日 中東戦争。イスラエル軍がシナイ半島を進撃
- 10月1日 阪急ブレーブスがパシフィックリーグで初優  
勝
- 10月31日 吉田茂元首相の国葬
- 1968年(昭和43)
- 12月18日 川端康成がノーベル文学賞を受賞
- 1969年(昭和44)
- 7月20日 アポロ11号が月面に着陸。人類が月に第一  
歩を踏む
- 10月19日 阪急ブレーブスがパ・リーグで3年連続優  
勝
- 1970年(昭和45)
- 3月15日 大阪・千里丘陵で“日本万国博覧会”を開  
催
- 3月31日 日本航空よど号のハイジャック事件起こる
- 4月1日 大阪音楽FM(FM大阪)が開業
- 7月1日 中国高速道路(吹田から)宝塚まで開通
- 11月25日 三島由紀夫が切腹自殺
- 1971年(昭和46)
- 3月30日 阪急宝塚南口駅の高架工事が完成
- 9月27日 昭和天皇・皇后両陛下がヨーロッパ訪問に  
ご出発

- 1972年(昭和47)
  - 3月27日 歌劇団で定年制を導入することを発表(実施は7月1日から)
- 1973年(昭和48)
  - 1月1日 『ノバレード・タカラヅカ』上演(小林一三生誕百年記念。本公演のゲストとして初めて卒業生が出演。大劇場1月公演と東京宝塚劇場3月公演)
  - 3月17日 宝塚ファミリーランド改造第1期工事が竣工。宝塚ヘルセンターは「大温泉」と改称
- 1974年(昭和49)
  - 2月21日 『虞美人』再々演(白井鐵造の名作。60周年記念に2公演続演)
  - 5月11日 宝塚歌劇60周年記念式典(宝塚大劇場)
  - 5月14日 宝塚歌劇大運動会を開催(阪急西宮球場)
  - 8月29日 『ベルサイユのばら』初演(池田理代子原作、植田紳爾脚本・演出。昭和51年までに各組で上演、観客合計140万人というブームになる)
  - 10月29日 株式会社宝塚企画を設立(営業開始は12月1日)
- 1975年(昭和50)
  - 3月27日 宝塚大劇場の公演期間を1カ月から45日制に変更「春の宝塚踊り」「ラムール ア パリ」(年12公演を8公演に)
  - 9月22日 第3回ヨーロッパ公演に出演(松本悠里、初風諄以下出演者46人、パリは鳳蘭を加え47人。翌年1月15日帰国)
- 1976年(昭和51)
  - 4月14日 宝塚大劇場および宝塚ファミリーランドの水曜定休を実施(正月、春休み、ゴールデンウィーク、夏休み、祝日を除く)
- 1977年(昭和52)
  - 3月25日 『風と共に去りぬ』初演(翌年にかけて4組で上演、観客133万人に達する)
  - 4月1日 研究科8年以上の生徒を契約者(タレント)とする新制度が発足
  - 8月8日 宝塚音楽出版株式会社(TMP)を設立(営業開始は9月1日)
- 1978年(昭和53)
  - 3月18日 宝塚ファミリーランドの第2期工事が完成。新本館と「宝塚パウホール」が竣工。宝塚パウホールこけろ落とし行事(天津乙女、春日野八千代、梓真弓ほか出演)
  - 4月1日 宝塚パウホール第1回公演『ホフマン物語』上演(3月31日に開場記念招待公演)
- 1980年(昭和55)
  - 9月6日 関西テレビで「OH!タカラヅカ」放送開始(59年3月24日まで毎週1回30分。184回放送)
- 1981年(昭和56)
  - 1月25日 「逸翁に捧げる夕べ」を大劇場で開催(24日はチャリティショー「宝塚この25年」)
  - 9月3日 宝塚歌劇大運動会を愛読者大会の代わりに開催(阪急西宮球場)
- 11月8日 株式会社東宝映画を設立。東宝の映画製作部門を譲り受け
- 1972年(昭和47)
  - 3月14日 大阪梅田・阪急ターミナルビルが竣工
  - 3月15日 山陽新幹線新大阪-岡山間が開通
  - 5月15日 沖縄が日本に復帰
  - 9月29日 日中共同声明、外交関係が樹立
- 1973年(昭和48)
  - 4月1日 京阪神急行電鉄株式会社は阪急電鉄株式会社と改称
  - 10月6日 第4次中近東戦争が起こる。この後石油危機が発生
- 1974年(昭和49)
  - 3月1日 阪急宝塚南口駅前再開発事業が完成。サンビオア開業
  - 9月29日 佐藤栄作元首相がノーベル平和賞受賞
- 1975年(昭和50)
  - 5月7日 イギリスのエリザベス女王が来日
  - 9月30日 昭和天皇、皇后両陛下がアメリカご訪問
  - 11月2日 阪急ブレーブスが日本シリーズで初優勝
- 1977年(昭和52)
  - 9月3日 プロ野球巨人軍の王貞治選手が本塁打756号の世界新記録を作り、初の国民栄誉賞を受ける
  - 10月27日 阪急ブレーブスが日本シリーズで3年連続優勝
- 1978年(昭和53)
  - 3月4日 “レディス・イン宝塚”開業
  - 5月4日 イギリス保守党サッチャー党首が先進国初の女性首相に就任
  - 6月28日 東京サミット(第5回主要先進国首脳会議)開催
  - 8月12日 日中平和友好条約に調印
  - 12月27日 ソビエト軍がアフガニスタン侵略
- 1980年(昭和55)
  - 7月19日 モスクワでオリンピック大会開催。日本など67カ国不参加
  - 9月22日 イラン・イラク戦争始まる
- 1981年(昭和56)
  - 2月16日 東京・日劇が閉場。半世紀の歴史の幕を閉じる
  - 3月19日 神戸ポートアイランド博覧会開催(9月15日まで)
  - 7月29日 イギリスのチャールズ皇太子がダイアナ嬢と結婚
  - 10月19日 福井謙一博士がノーベル化学賞を受賞
- 1982年(昭和57)
  - 4月5日 松竹歌劇団が浅草・国際劇場でのレビュー公演の幕を閉じる

出典：宝塚歌劇団編『すみれ花歳月を重ねて—宝塚歌劇90年史—』宝塚歌劇団2004年4月